

A FULLY ITALIAN GILLETTE FACTORY

Ferdinando Frega — Nando the Scribe

Gillettenarrative.com

完全にイタリア製のGILLETTE工場

GILLETTEの生産工場がヨーロッパ各地 — ドイツ、イギリス、スペイン — に散らばっていることは誰もが知っていた。ずっと後になって、ロシア市場向けに東欧のどこかの国にも工場があることが明るみに出た。だが、ナポリにGILLETTE BLUE II X 10のカミソリを作る工場があることは、誰ひとり知らなかった。EANコードも製品コードも、ロット番号までそろっていた。

季節ごとの販促までやっていた。10+2本無料、10+4本無料という販促仕様で — れっきとした支社の仕事ぶりである。ただし公式のオフィスはミラノにあり、最初はバルディッセラ通り5番地、のちにG.B.ピレッリ通り18番地で、あのナポリの工場の存在など誰も思いもしなかった。

すべてを暴いたのはNIELSENのデータだった。売上と販売数量を突き合わせると、入ってくるはずの金が足りない — しかしGILLETTE EUROPEの財務はジュネーヴから国際的に管理されており、イタリアには独自の出納部門がなかった。

売上は足りないままだった。数字が無視できない大きさになったとき、われわれの社長はミラノ検察庁の扉をくぐり、被疑者不詳のまま刑事告訴した。

非公式の製品と公式の製品を見分けるのは容易ではなかったが、ひとつの細部がすぐに目についた。パッケージを開けると、カミソリにはGILLETTEの銘がある — だが中身は競合のものだった。

製造の癖が正体を明かしていた — 刃の特性、刃の位置、そして品質管理に。

捜査はナポリのある地下室にたどり着いた。そこからPiaggioの三輪トラックが1時間に1度、規則正しく出ていく。積んでいるのは20個入り84パックのパレットがひとつ — GILLETTEの標準仕様だ — 会社の納品書まで付いていた。それがナポリの卸売業者の大半を回り、卸のほうは公式の製品に混ぜていた。

好奇心があまりに強かったので、その一帯は7日間カメラで監視された。そこで分かったのは、偽造側の人間がまじめなプロだということだった。納品も生産も、文句のつけようがない — 東ベルリンにいるかのようだった。あははは。

Guardia di Finanzaが現場に踏み込んで全員を逮捕すると決めたとき、そこでは家族がまるごと働いていた — 包装、在庫、仕分け、グラフィック、請求。メインストリートにあるボストンの支社のようだった。

およそ38人が逮捕された。だが市場のパニックを避けるため、捜査は一度も公表されなかった。顧客と消費者に不安と損害を与えることになっただろうから、検察官は一切を封印すると決めた。

だが本当に印象に残ったことが二つある。ひとつは、物流と配送に結びついた組織と品質管理。もうひとつは、取り調べのあとでグループの女たちが、Gillette Italiaで雇ってもらえないかと尋ねたことだ。

プーリア出身の社長は、一度も笑わなかった。悩んでいたのだ — 犯罪行為と会社への損害だけではない。ミラノのイタリア・アメリカ商工会議所の会頭として、本物の才能と質をたったいま認めてしまったからだ — 決して給与台帳に載せることのできない才能を。

フェルディナンド